Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies,
Showa Women's University, 2018, Vol. 20, 1-14.

論　文

大学生におけるひとりで過ごすことに関する感情・評価、自我同一性と友人への気遣いとの関連

増淵　裕子・満野　史子・今城　周造

Thoughts and assessments about spending time alone, ego identity, and concern for friends in undergraduate students

Yuko MASUBUCHI, Fumiko MITSUNO and Shuzo IMAJO

This study, conducted targeting undergraduate students, aimed to (1) examine the effects that thoughts on, and assessments of, spending time alone, as well as ego identity, have on the subjects' concern for friends, and (2) study if differences regarding (1) varied according to the subjects' academic year. Investigations using a questionnaire were carried out on 388 female university students. A simultaneous analysis of multiple populations revealed the following: (1) Thoughts/assessments about "fulfillment/satisfaction" promoted "prosocial concerns" through "psychosocial identity." (2) Thoughts/assessments about "loneliness/anxiety" and "desire for isolation" inhibited "prosocial concerns" through "psychosocial identity." (3) The effects on "concern for friends" differed between 1st- and 2nd-grade students and 3rd- and 4th-grade students. The determinants of "patience concern" (mainly to avoid conflicts), were found to differ according to the subjects' academic year. With 1st- and 2nd-grade students, moreover, not only the social aspects of ego identity but also subjective aspects affected their "concern for friends." The findings of (1) through (3) above appear to show that the maturation of thoughts/assessments about spending time alone affected the maturation of "concern for friends" as an example of interpersonal relationships, and that the method of influence was linked to the subjects' state of growth and development.

Key words : thoughts and assessments about spending time alone（ひとりで過ごすことに関する感情・評価）, ego identity（自我同一性）, concern for friends（友人への気遣い）, university students（大学生）, adolescence（青年期）

問題と目的

近年、「ぼっち（朝日新聞, 2014；東京新聞, 2014）」「便所飯（朝日新聞, 2009）」「ランチメイト症候群（町沢, 2002）」など、他者の目に非常に敏感でひとりで安心して過ごせない青年の存在が指摘されている。一方で、現代青年の特徴として、友人関係の希薄化や個人主義（宮下, 2009）も指摘されており、他者との親密な交流を避け、「ひとりの時間」に閉じこもるような青年も存在する。このように、ひとりで過ごすことをどのように捉えているか、友人とどのように付き合っているかは、現代青年の発達や臨床的問題を理解する上で重要なテーマである。

本研究では、ひとりで過ごすことに関する感情・評価と友人関係との関連について、自我同一性との関連も含めて検討していく。

ひとりで過ごすことに関する感情・評価について、増淵（2014）は、「孤独・不安」「自立願望」「充実・満足」「孤絶願望」の4側面が見られることを明らかにし、ひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度を作成している。「孤独・不安」は、ひとりで過ごすことをネガティブに捉え、孤独・不安・苦手意識等の感情や孤独なイメージを

抱いている感情・評価、「自立願望」は、ひとりで過ごすことをポジティブに受け止めようとし、ひとりでも過ごせるようになりたいという願望や、自立的なイメージを抱いている感情・評価、「充実・満足」は、ひとりで過ごすことをポジティブに受け止めた上で、ひとりで過ごすことに充実・満足感を抱いている感情・評価、「孤絶願望」は、対人交渉に苦痛を感じ、常にひとりでいたいという願望を抱いている感情・評価のことである。この尺度の旧版を用いて、海野（2009）は、ひとりで過ごすことに関する感情・評価と友人に対する感情との関連を検討し、ひとりで過ごすことに「充実・満足」「自立願望」の感情・評価が高いほど、友人に対してもポジティブで安定した感情（「信頼・安定」「独立」）が高いこと、ひとりで過ごすことに「充実・満足」の感情・評価が高いほど、友人に対してネガティブな感情（「不安・懸念」「ライバル意識」「葛藤」）が低いことを明らかにしている。（ただし、尺度の旧版を用いたため、「孤絶願望」については検討されていない。）ひとりで過ごすことにポジティブな感情・評価を持てることは、安定した適応的な友人関係と関連することが推測される。

友人関係に関して、本研究では、友人への気遣いに注目する。満野（2015）は、気遣いを「相手および相手との関係のために行われる向社会的行動あるいは自己防衛および関係維持のために本心を隠す抑制的行動」と定義し、「向社会的気遣い」と「抑制的気遣い」の2因子が存在することを見出した。その後、「抑制的気遣い」にはさらに「尊重気遣い」と「我慢気遣い」の2側面があることを明らかにし（満野・今城, 2017a, 2017b）、最終的に、友人への気遣いには「向社会的気遣い」「尊重気遣い」「我慢気遣い」の3種類が存在することを見出している（満野・今城, 2017b）。「向社会的気遣い」は相手および相手との関係のために行われる向社会的行動、「尊重気遣い」は関係維持のために行われる本心を隠す抑制的行動、「我慢気遣い」は自己防衛のために本心を隠す抑制的行動のことである。また、「尊重気遣い」（友人を尊重して良好な関係を維持しようとする）と「我慢気遣い」（本音を我慢することで友人との葛藤を避ける）は、どちらも抑制的行動であるが、「尊重気遣い」は、友人満足感と弱い正の相関や、親密さを求めない友人満足感への正の影響が見られたことから、抑制的気遣いのプラス面であり、「我慢気遣い」は、友人満足感と弱い負の相関や、ストレス反応への正の影響が見られたことから、抑制的気遣いのマイナス面であると考えられている（満野・今城, 2017a, 2017b）。一方、「向社会的気遣い」は友人満足感や親友満足感に正の影響を与えることも示されており（満野・今城, 2017a, 2017b）、「尊重気遣い」と同様に気遣いのプラス面であると考えられる。

以上を踏まえ、ひとりで過ごすことに関する感情・評価と友人への気遣いの関連については、ひとりで過ごすことにポジティブな感情・評価（「充実・満足」）が高いほど、友人への気遣いのプラス面（「向社会的気遣い」「尊重気遣い」）が高くなり、マイナス面（「我慢気遣い」）が低くなることが予測される。また、ひとりで過ごすことにネガティブな感情・評価（「孤独・不安」「孤絶願望」）が高いほど、友人への気遣いのマイナス面（「我慢気遣い」）が高くなり、プラス面（「向社会的気遣い」「尊重気遣い」）が低くなることが予測される。

なお、ひとりで過ごすことに関する感情・評価が友人への気遣いに影響を及ぼす際には、自我同一性が媒介すると推測される。増淵（2014）は、青年期の自我同一性形成につながる「ひとりの時間」とはどのようなものかという問題意識から研究を行い、ひとりで過ごすことに関する感情・評価が自我同一性に影響を及ぼすことを明らかにしている。また、自我同一性と対人関係との関連も、複数の研究で指摘されている（川本, 2015；畑野, 2010；松下・吉田, 2009など）。

自我同一性に関して、本研究では、谷（2001）の多次元自我同一性尺度を用いて検討する。この尺度は、Erikson理論に基づいて作成されており、4つの下位概念から自我同一性の感覚の高さを捉えることができる、信頼性・妥当性が備わった精度の高い尺度である。谷（2001）は、自我同一性を「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」「対自的同一性」「心理社会的同一性」の4つの下位概念からなるとし、「自己斉一性・連続性」とは「自分が自分であるという一貫性を持っており、時間的連続性を持っているという感覚」、「対自的同一性」とは「自分自身が目指すべきもの、

望んでいるものなどが明確に意識されている感覚」、「対他的同一性」とは「他者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚」、「心理社会的同一性」とは「現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚」のことであるとしている。

さらに、谷（2008）は、上記の4つの自我同一性について、2種類の分類ができることを指摘している。第一に、①「中核的同一性」（「自己斉一性・連続性」と「対他的同一性」）、②「心理社会的自己同一性」（「対自的同一性」と「心理社会的同一性」）とする分け方であり、第二に、①対自的で主観的なアイデンティティの感覚（「自己斉一性・連続性」と「対自的同一性」）、②対他的で社会的なアイデンティティの感覚（「対他的同一性」と「心理社会的同一性」）とする分け方である。第一の分類に関しては、谷（2001）のデータに対する共分散構造分析の結果、「自己斉一性・連続性」と「対他的同一性」の背後に「中核的同一性」、「対自的同一性」と「心理社会的同一性」の背後に「心理社会的自己同一性」という構成概念を仮定したほうが良いことが指摘されており（谷, 2008）、この第一の分類を使用して検討や考察がなされている研究は多い（原田, 2012；畑野・原田, 2014；畑野, 2010；稲垣, 2013など）。一方、第二の分類を用いて考察している研究も存在する（川本, 2015）。本研究では、友人への気遣いという対人関係を扱うことから、対人関係とはあまり関連しないと考えられる対自的で主観的なアイデンティティの感覚と、対人関係との関連が予測される対他的で社会的なアイデンティティの感覚という第二の分類に注目していく。

ひとりで過ごすことに関する感情・評価と自我同一性との関連について、増淵（2014）の研究では、「充実・満足」と「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「心理社会的同一性」との間に正の相関（$rs = .14 \sim .27$）、「孤独・不安」および「孤絶願望」と自我同一性の4下位尺度すべてとの間に負の相関（「孤独・不安」：$rs = -.12 \sim -.20$、「孤絶願望」：$rs = -.16 \sim -.27$）、「自立願望」と「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」との間に負の相関が見られている。また、増淵（2014）は、パス解析により、「個人的活動への没頭」という「ひとりの時間」の過ごし方が、ひとりで過ごす「充実・満足」を高め、「充実・満足」は自我同一性全体を促進すること、また、同時に、「個人的活動への没頭」の過ごし方は、「孤絶願望」を高め、自我同一性全体を抑制もすることを明らかにしている。以上より、ひとりで過ごすことに関する感情・評価と自我同一性の関連について、本研究でも、増淵（2014）と同様の関連が見られると予測される。

さらに、自我同一性と対人関係との関連について、川本（2015）は、主観的なアイデンティティの側面（「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」）は養育者との関係性と関連し、社会的なアイデンティティの側面（「対他的同一性」「心理社会的同一性」）は友人や恋人との関係性と関連することを明らかにしている。谷（2008）の第二の分類にあるように、「対他的同一性」と「心理社会的同一性」は、自我同一性の4側面の中でも、他者や社会との関係に関する同一性であるため、友人への気遣いに影響が見られることが予測される。一方、「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」は他者や社会との関係というよりも自己の内面における主観的なアイデンティティであるため、気遣いには影響しないだろうと考えられる。また、松下・吉田（2009）は、友人へ気を遣う関わり方（「気遣い」）や深い関わりを回避する関わり方（「関係回避」）が自我同一性の低さと関連することを明らかにしている。この研究では気遣いの3側面を考慮していないため、どのような気遣いが自我同一性の高低と関連するかについて検討する必要がある。自我同一性、特に「対他的同一性」「心理社会的同一性」が高いということは、他者や社会の中で適応的に自分を表現したり発揮したりできるという自信があるということであり、成熟した気遣いができると予測される。そのため、他者を助ける「向社会的気遣い」や友人を尊重する「尊重気遣い」が高くなり、本音を我慢する「我慢気遣い」は低くなると推測される。

なお、ひとりで過ごすことに関する感情・評価と自我同一性が気遣いに及ぼす影響は、発達や学年によって異なることが推測されるため、多母集団同時分析により探索的に検討する。

以上より、本研究では、大学生を対象に、ひとりで過ごすことに関する感情・評価と自我同一性

が、友人への気遣いに及ぼす影響を検討することを目的とする。また、その際、学年によって違いが見られるかについても探索的に検討を行う。本研究の仮説モデルをFigure 1に示す。

仮説1：ひとりで過ごすことに関してネガティブな感情・評価が高いほど、自我同一性の主観的側面と社会的側面が低くなり（Figure 1の1a, 1b）、その中でも、自我同一性の社会的側面が低くなることで、友人への気遣いのマイナス面が促進され、プラス面が抑制されるだろう（Figure 1の3a, 3b）。

仮説2：ひとりで過ごすことに関してポジティブな感情・評価が高いほど、自我同一性の主観的側面と社会的側面が高くなり（Figure 1の2a, 2b）、その中でも、自我同一性の社会的側面が高くなることで、友人への気遣いのプラス面が促進され、マイナス面が抑制されるだろう（Figure 1の3a, 3b）。

方　法

調査対象者

都内にある女子大学の学生388名を調査対象とし、不回答を希望した4名を除く384名（1年77名・2年147名・3年55名・4年102名・学年不明3名、平均20.13歳、$SD = 1.21$）を分析対象とした。

調査時期

2016年10～11月。

実施方法

授業時間等を利用して集団実施した。

調査内容

1. ひとりで過ごすことに関する感情・評価26項目　増淵（2014）のひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度を使用した。「孤独・不安」「自立願望」「充実・満足」「孤絶願望」の4下位尺度について、「とてもそう思う（7）」「そう思う（6）」「どちらかといえばそう思う（5）」「どちらともいえない（4）」「どちらかといえばそう思わない（3）」「あまりそう思わない（2）」「まったく思わない（1）」の7件法で回答を求めた。

2. 多次元自我同一性20項目　谷（2001）の多次元自我同一性尺度を使用した。「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」の4下位尺度について、「非常にあてはまる（7）」「かなりあてはまる（6）」「どちらかというとあてはまる（5）」「どちらともいえない（4）」「どちらかというとあてはまらない（3）」「ほとんどあてはまらない（2）」「全くあてはまらない（1）」の7件法で回答を求めた。

3. 友人への気遣い46項目　満野（2015）の友人への気遣い尺度の25項目に、21項目を追加した46項目を質問紙に含めた(注)。このうち、満野・今城（2017b）の研究で明らかになった因子構造に基づいた31項目（改訂版友人関係における気遣

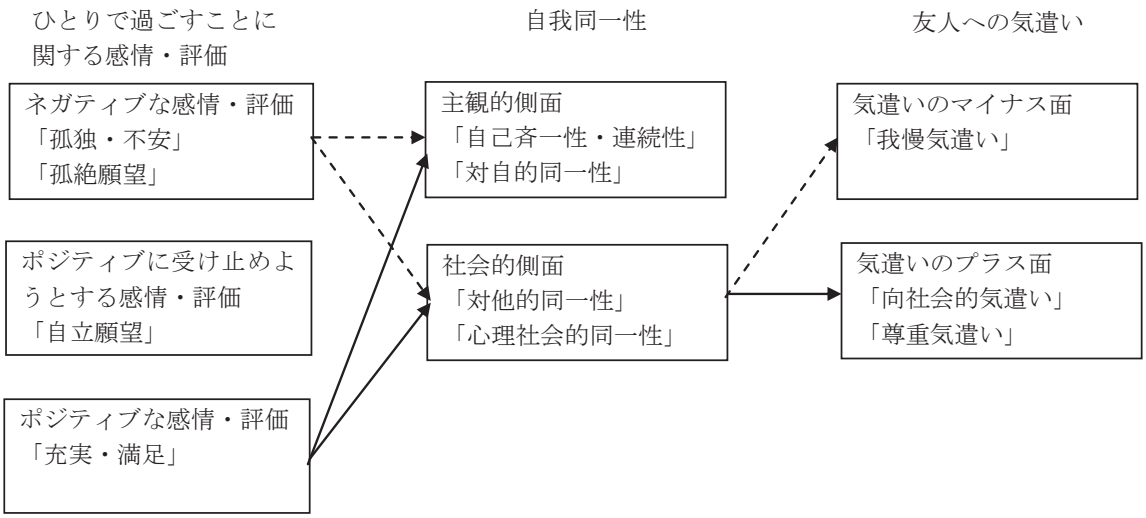

Figure 1　本研究における仮説モデル（実線は正のパス，破線は負のパスを仮定）

い尺度）を分析に使用した。「非常によくあてはまる（7）」「あてはまる（6）」「少しあてはまる（5）」「どちらともいえない（4）」「あまりあてはまらない（3）」「あてはまらない（2）」「全くあてはまらない（1）」の7件法で回答を求めた。下位尺度は、「向社会的気遣い」「尊重気遣い」「我慢気遣い」の3つである。

倫理的配慮

配布した質問紙に、研究の趣旨、倫理的配慮について説明した文書を添付した。説明には、調査の目的、調査結果は研究の目的以外には使用しないこと、調査への参加は任意であり、参加の拒否による不利益は一切ないこと、得られたデータは個人が特定されない形で処理・分析し、調査データは責任をもって厳重に管理すること、本研究に対する問い合わせ先などが含まれている。質問紙には、調査に協力したくない場合に×印を記入する欄を設け、これらの者は分析対象から除外した。質問紙への回答をもって、調査協力の同意を得たものとみなした。なお本研究は、昭和女子大学倫理審査委員会の審査を受け、承認されている（承認番号16-25）。

結　果

本研究の分析には、IBM SPSS Statistics（ver. 24.0）、およびAmos（ver.24.0）を用いた。

1. 尺度の確認と下位尺度得点の算出

（1）ひとりで過ごすことに関する感情・評価　26項目を対象として、確認的因子分析を行ったところ、増淵（2014）と同様の4因子構造がみられた（Table 1）。Cronbachのα係数は、「孤独・不安」が.88、「自立願望」が.75、「充実・満足」が.84、「孤絶願望」が.76であった。

（2）多次元自我同一性　多次元自我同一性の各下位尺度について、Cronbachのα係数を算出した結果、「自己斉一性・連続性」は.87、「対自的同一性」は.83、「対他的同一性」は.83、「心理社会的同一性」は.79であった。

（3）友人への気遣い　31項目を対象として、確認的因子分析を行ったところ、満野・今城（2017b）と同様の3因子構造がみられた（Table 2）。Cronbachのα係数は、「向社会的気遣い」が.91、「尊重気遣い」が.84、「我慢気遣い」が.92であった。

（4）下位尺度得点の算出と各下位尺度得点の平均値　3つの尺度ともに、各下位尺度の合計点を項目数で除したものを下位尺度得点とした。ひとりで過ごすことに関する感情・評価の下位尺度得点の平均値（*SD*）は、「孤独・不安」が2.54（0.90）、「自立願望」が5.46（0.78）、「充実・満足」が5.19（1.09）、「孤絶願望」が2.73（1.26）であった。多次元自我同一性の下位尺度得点の平均値（*SD*）は、「自己斉一性・連続性」が4.74（1.27）、「対自的同一性」が3.96（1.17）、「対他的同一性」が4.00（1.16）、「心理社会的同一性」が4.24（0.99）であった。友人への気遣いの下位尺度得点の平均値（*SD*）は、「向社会的気遣い」が5.73（0.74）、「尊重気遣い」が4.97（0.79）、「我慢気遣い」が4.32（1.02）であった。

2. 各変数の学年差の検討

各変数の各下位尺度について、学年（1～4年）を独立変数とした分散分析を実施した。結果をTable 3に示す。ひとりで過ごすこと関する感情・評価については、「孤絶願望」のみ学年の主効果が見られ、多重比較（Tukey法）の結果、4年生より1・2年生の方が高く、また、3年生より1年生の方が高かった（$F(3,374) = 10.02, p < .001$）。

多次元自我同一性については、1・2年生より4年生の方が「対自的同一性」「心理社会的同一性」が高かった（$F(3,363) = 6.81, p < .001, F(3,365) = 5.27, p < .001$）。また、1・2年生より3・4年生の方が「対他的同一性」が高かった（$F(3,369) = 7.53, p < .001$）。

友人への気遣いについては、どの下位尺度においても学年差は見られなかった。

ひとりで過ごすことに関する感情・評価と多次元自我同一性に学年差が見られ、1・2年と3・4年では違いがある可能性が想定されるため、以後の分析は、学年別（1・2年／3・4年）に行うこととした。

3. ひとりで過ごすことに関する感情・評価、自我同一性と友人への気遣いとの関連

（1）相関分析　ひとりで過ごすことに関する感情・評価、自我同一性と友人への気遣いがどのように関連しているかを検討するため、学年別

Table 1　ひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度の確認的因子分析結果（標準化推定値）

質問項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ 孤独・不安				
13 「ひとりの時間」はさみしい	.76			
21 「ひとりの時間」が苦手だ	.73			
8 ひとりで過ごしていると不安になる	.73			
20 「ひとりの時間」は孤独だ	.73			
25 できることなら、ひとりでいたくない	.71			
14 ひとりでいると人の目が気になる	.66			
23 ひとりで過ごすことに苦痛を感じるようになった	.63			
6 ひとりでいる人を見ると、さびしい人だと思う	.60			
2 ひとりでいても安心して過ごすことができる＊	.54			
7 本当は友達と一緒にいたいが、仕方なくひとりで過ごしている	.48			
1 ひとりで過ごすのは格好悪い	.42			
Ⅱ 自立願望				
9 「ひとりの時間」を楽しめるようになりたい		.54		
24 友達と一緒でなくても行動できるようになりたい		.53		
18 ひとりでも過ごせる人は素敵だと思う		.76		
26 ひとりで過ごすことには自立のイメージがある		.48		
3 ひとりでも生きていける人間になりたい		.41		
19 ひとりで過ごすことへの抵抗が減った		.55		
16 「ひとりの時間」を自分の成長のために使いたい		.50		
5 ひとりで過ごすのも悪くないと思えるようになった		.43		
Ⅲ 充実・満足				
12 「ひとりの時間」を有効に使えるようになった			.77	
22 「ひとりの時間」の過ごし方に満足している			.77	
11 充実した「ひとりの時間」を持てていると思う			.87	
17 バランス良く「ひとりの時間」が作れている			.62	
Ⅳ 孤絶願望				
10 人と一緒にいることが苦痛だ				.75
4 できることなら、いつもひとりでいたい				.75
15 できることなら、だれもいないところに住みたい				.67
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	-	-.27	-.58	-.06
Ⅱ		-	.45	.28
Ⅲ			-	.12

＊は逆転項目
$\chi^2 = 917.414$, $df = 293$, $p < .001$, CFI = .829, RMSEA = .075

（1・2年／3・4年）に各変数間の相関分析を実施した（Table 4）。まず、ひとりで過ごすことに関する感情・評価と自我同一性との関連については、どちらの群でも、「孤独・不安」が高いほど自我同一性の4つの下位尺度すべてが低く（1・2年：rs = -.22～-.48、3・4年：rs = -.18～-.37）、「孤絶願望」が高いほど自我同一性の4つの下位尺度すべてが低く（1・2年：rs = -.18～-.47、3・4年：rs = -.28～-.48）、「充実・満足」が高いほど「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「心理社会的同一性」が高かった（1・2年：rs = .19, .22, .20、3・4年：rs = .19, .33., .37）。加えて、1・2年生では「自立願望」が高いほど「対他的同一性」が低かった（r = -.14）。

次に、自我同一性と気遣いとの関連については、どちらの群でも、「対自的同一性」「心理社会的同一性」が高いほど「向社会的気遣い」が高く（1・2年：rs = .22, .24、3・4年：rs = .22, .30）、「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」が高いほど「我慢気遣い」が低かった（1・2年：rs = -.22, -.22、3・4年：rs = -.18, -.28）。加えて、1・2年生では、「対他的同一性」が高いほど「尊重気遣

Table 2　改訂版友人関係における気遣い尺度の確認的因子分析結果(標準化推定値)

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	向社会的気遣い			
17	友人が悩んでいるようだったので、相談に乗る	.88		
18	友人が困っているようだったので、手を貸す	.84		
1	友人が悩んでいるようだったので、話を聞く	.74		
3	友人が落ち込んでいるようだったので、励ます	.72		
14	友人が具合悪そうな時、介抱してあげる	.72		
13	友人が困っているようだったので、助言をする	.70		
15	友人がよく喋るときは、よくうなずいてあげる	.67		
11	友人が何かいつもと様子が違ったので、声をかける	.63		
Ⅱ	尊重気遣い			
24	友人と話している時、友人を否定したくなっても言わないでおく		.73	
25	友人に対して言いたいことがある時、友人が気分を害しそうならば言わないでおく		.72	
26	友人がたいしたことないことで自慢していても、感心してあげる[a]		.66	
21	友人が言われたくなさそうなことは、言わないでおく		.59	
12	友人の好きなものに興味がなくても、興味がなさそうな態度はとらないでおく		.58	
23	友人が同意を求めているようだったら、本心でなくても同意してあげる		.58	
35	友人が傷つくであろう本当のことは言わないでおく[a]		.57	
30	友人の好みを理解できなくても、とりあえず「いいね」と言っておく[a]		.51	
38	興味のない話題をふられても、興味のある振りをする[a]		.51	
34	友人の失敗や不祥事を知っても、本人の前では知らない振りをする[a]		.50	
Ⅲ	我慢気遣い			
33	友人から理不尽なことを言われて気分を害しても、言い返さないでおく[a]			.85
36	友人から聞き捨てならないことを言われても、我慢して黙っている[a]			.80
32	自分が傷つくようなひどいことを友人から言われても、我慢する[a]			.76
41	友人から不愉快な態度をとられても、我慢する[a]			.78
43	友人から苦情を言われた時、こちらにも言い分があっても、我慢する[a]			.74
46	自分とは異なる意見を友人から言われた時、自分にとって重要なことでも、反論はやめておく[a]			.69
22	友人と意見が合わない時、何も言わないで我慢する			.69
27	友人と言い争いになりそうならば、自分の意見を主張しないことにする[a]			.65
45	友人の愚痴を聞かされて、「友人の方が悪い」と思っても、指摘するのはやめておく[a]			.64
10	自分が好きなことを友人から否定された時、不愉快だが、言い返さないでおく			.61
2	友人から思いやりのない言葉をかけられた時、言い返そうと思っても我慢する			.58
4	友人から約束を破られた時、腹は立つが、文句は言わないでおく			.58
40	友人が好きなものを、自分は好きではなくても、無理に好きと言って話を合わせる[a]			.54

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	-	.44	.17
Ⅱ		-	.74

$\chi^2 = 1446.88$, $df = 431$, $p < .001$, CFI = .834, RMSEA = .078
[a]追加項目

い」が低く（$r = -.16$）、「対自的同一性」「心理社会的同一性」が高いほど「我慢気遣い」が低かった（$rs = -.18, -.19$）。

最後に、ひとりで過ごすことに関する感情・評価と気遣いとの関連については、どちらの群でも、「自立願望」が高いほど「向社会的気遣い」「尊重気遣い」が高く（1・2年：$rs = .25, .22$、3・4年：$rs = .23, .21$）、「孤絶願望」が高いほど「向社会的気遣い」が低かった（1・2年：$r = -.29$、3・4年：$r = -.25$）。加えて、1・2年生では、「充実・満足」が高いほど「向社会的気遣い」が高く（$r = .15$）、3・4年生では「充実・満足」が高いほど「尊重気遣い」が高かった（$r = .18$）。

(2) 多母集団同時分析　ひとりで過ごすことに関する感情・評価が自我同一性に影響し、それが友人への気遣いに影響すると仮定し、学年別（1・2年／3・4年）に多母集団同時分析を実施した。欠損値は完全情報最尤推定法により処理した。解

Table 3　各変数の学年別平均値（標準偏差）と分散分析結果

	1年（N＝72-77）	2年（N＝141-146）	3年（N＝52-55）	4年（N＝95-102）	F値	効果量 partial η^2	多重比較（Tukey法）
ひとりで過ごすことに関する感情・評価							
孤独・不安	2.70（0.83）	2.50（0.87）	2.73（1.10）	2.39（0.88）	2.52	.02	
自立願望	5.50（0.75）	5.57（0.80）	5.31（0.78）	5.36（0.74）	2.25	.02	
充実・満足	5.20（1.06）	5.23（1.04）	4.89（1.31）	5.26（1.03）	1.61	.01	
孤絶願望	3.11（1.38）	2.93（1.21）	2.45（1.13）	2.26（1.09）	10.02***	.07	1・2年＞4年，1年＞3年
多次元自我同一性							
自己斉一性・連続性	4.54（1.20）	4.64（1.33）	4.85（1.25）	5.00（1.20）	2.43	.02	
対自的同一性	3.57（1.03）	3.89（1.27）	3.98（1.07）	4.35（1.07）	6.81***	.05	4年＞1・2年
対他的同一性	3.72（1.10）	3.79（1.10）	4.31（1.19）	4.34（1.17）	7.53***	.06	3・4年＞1・2年
心理社会的同一性	4.06（1.08）	4.11（0.96）	4.26（1.03）	4.57（0.91）	5.27***	.04	4年＞1・2年
友人関係における気遣い							
向社会的気遣い	5.69（0.72）	5.68（0.64）	5.69（0.74）	5.89（0.84）	1.87	.02	
尊重気遣い	5.12（0.83）	4.93（0.80）	4.84（0.76）	5.01（0.74）	1.62	.01	
我慢気遣い	4.56（0.98）	4.33（1.08）	4.26（0.89）	4.17（1.00）	2.19	.02	

***p<.001

Table 4　各変数間の相関係数（1・2年／3・4年）

	ひとりで過ごすことに関する感情・評価				多次元自我同一性				友人に対する気遣い		
	孤独・不安	自立願望	充実・満足	孤絶願望	自己斉一性・連続性	対自的同一性	対他的同一性	心理社会的同一性	向社会的気遣い	尊重気遣い	我慢気遣い
孤独・不安		-.24***	-.44***	-.07$^{n.s.}$	-.48***	-.41***	-.22***	-.26***	-.08$^{n.s.}$	-.07$^{n.s.}$	.03$^{n.s.}$
自立願望	-.19*		.39***	.25***	-.05$^{n.s.}$	.07$^{n.s.}$	-.14*	.03$^{n.s.}$	.25***	.22***	.07$^{n.s.}$
充実・満足	-.56***	.29***		.07$^{n.s.}$	.19**	.22**	.00$^{n.s.}$	.20**	.15*	.12$^{n.s.}$	-.11$^{n.s.}$
孤絶願望	.02$^{n.s.}$	.22**	.05$^{n.s.}$		-.19**	-.18**	-.47***	-.38***	-.29***	.07$^{n.s.}$	.10$^{n.s.}$
自己斉一性・連続性	-.32***	.00$^{n.s.}$	.19*	-.40***		.51***	.51***	.52***	.02$^{n.s.}$	-.06$^{n.s.}$	-.22***
対自的同一性	-.37***	.04$^{n.s.}$	.33***	-.28***	.62***		.36***	.59***	.22**	.02$^{n.s.}$	-.18**
対他的同一性	-.18*	-.01$^{n.s.}$	.16$^{n.s.}$	-.48***	.72***	.46***		.54***	.08$^{n.s.}$	-.16*	-.22***
心理社会的同一性	-.31***	.01$^{n.s.}$	.37***	-.42***	.70***	.66***	.66***		.24***	-.08$^{n.s.}$	-.19**
向社会的気遣い	-.15$^{n.s.}$	.23**	.08$^{n.s.}$	-.25**	.12$^{n.s.}$	.22**	.11$^{n.s.}$	.30***		.37***	.15*
尊重気遣い	-.09$^{n.s.}$	.21*	.18*	.03$^{n.s.}$	-.06$^{n.s.}$	.10$^{n.s.}$	-.08$^{n.s.}$	.07$^{n.s.}$	.47***		.66***
我慢気遣い	.02$^{n.s.}$	-.06$^{n.s.}$	-.01$^{n.s.}$	.07$^{n.s.}$	-.18*	-.03$^{n.s.}$	-.28***	-.12$^{n.s.}$	.13$^{n.s.}$	.65***	

対角線の右上側が1・2年生、左下側が3・4年生の値。　*p<.05，**p<.01，***p<.001

析においては、仮説（Figure 1）と相関係数に基づいたモデルを作成してパス解析を行い、その後、有意でないパスを削除し、再度パス解析を行った。さらに、ひとりで過ごすことに関する感情・評価から友人への気遣いに対して直接影響することが想定されるパスを追加した。なお、自我同一性の4下位尺度の誤差間、および友人への気遣いの3下位尺度の誤差間には共変動を仮定した。最終的な結果をFigure 2に示す。モデルの適合度指標は、χ^2＝81.891（p<.01.），df＝50, CFI＝.976, AIC＝289.891, RMSEA＝.041と十分な値が得られた。なお、自我同一性の4下位尺度の誤差間の相関係数は、1・2年生では.23～.51、3・4年生では.34～.63.、気遣いの3下位尺度の誤差間の相関係数は、1・2年生では.20～.67、3・4年生では.18～.68であった。

第一に、どちらの群でも共通した結果について述べる。まず、自我同一性の媒介効果としては、「孤独・不安」「孤絶願望」が4つの自我同一性に負の影響をしており、その中でも「心理社会的同一性」が低くなることで「向社会的気遣い」が低くなるという影響が見られた。また、「充実・満

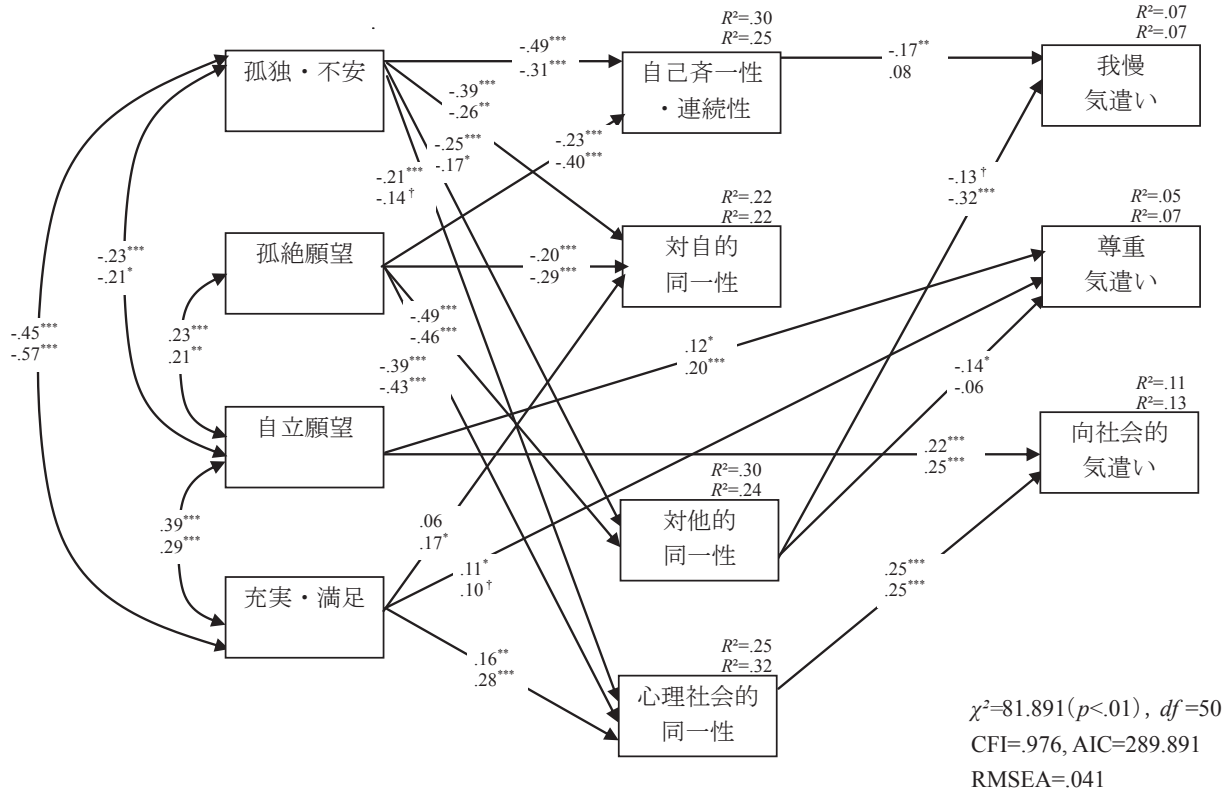

Figure 2　多母集団同時分析の結果

（上段は1・2年，下段は3・4年，†p<.10，*p<.05，**p<.01，***p<.001，誤差変数および誤差変数間の共分散のパスは省略）

足」が「心理社会的同一性」に正の影響し、「心理社会的同一性」は「向社会的気遣い」に正の影響をしていた。

次に、ひとりで過ごすことに関する感情・評価から気遣いへ直接効果としては、「自立願望」から「向社会的気遣い」と「尊重気遣い」への正の影響、「充実・満足」から「尊重気遣い」への弱い正の影響が見られた。

第二に、学年差が見られた結果について述べる。自我同一性の媒介効果としては、1・2年生において、「孤独・不安」が「自己斉一性・連続性」に負の影響をし、「自己斉一性・連続性」は「我慢気遣い」に弱い負の影響をしていた。また、「孤独・不安」「孤絶願望」が「対他的同一性」に負の影響をし、「対他的同一性」は「尊重気遣い」に弱い負の影響をしていた。一方、3・4年生では、「孤独・不安」「孤絶願望」が「対他的同一性」に負の影響をし、「対他的同一性」は「我慢気遣い」に負の影響をしていた。1・2年でも有意傾向でこの傾向は見られたが（β＝-.13, p<.10）、3・4年生でのパス係数（β＝-.32, p<.001）が顕著であった（ただしz＝-1.35）。さらに、1・2年生と3・4年生で同じ有意なパスではあるがパス係数に有意差があったものは、「孤独・不安」から「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」への負の影響（1・2年＞3・4年；zはそれぞれ2.92, 1.98）、「孤絶願望」から「自己斉一性・連続性」への負の影響（3・4年＞1・2年；z＝-2.00）であった。なお、ひとりで過ごすことに関する感情・評価から友人への気遣いへの直接効果については、有意な学年差は見られなかった。

考　察

結果のまとめ

本研究の目的は、大学生を対象に、ひとりで過ごすことに関する感情・評価と自我同一性が、友人への気遣い行動に及ぼす影響を検討すること、また、その際、学年によって違いが見られるかに

ついても検討を行うことであった。

多母集団同時分析の結果、第一に、「孤独・不安」「孤絶願望」が高いほど自我同一性の4下位尺度が低くなり、その中でも「心理社会的同一性」が低くなることで「向社会的気遣い」が抑制される、また、特に3・4年生では「対他的同一性」が低くなることで「我慢気遣い」が促進されるという結果となり、仮説1（ひとりで過ごすことに関してネガティブな感情・評価が高いほど、自我同一性の主観的側面と社会的側面が低くなり、その中でも、自我同一性の社会的側面が低くなることで、友人への気遣いのマイナス面が促進され、プラス面が抑制されるだろう）が支持された。ただし、1・2年生では、弱い影響ではあるが、「孤絶願望」「孤独・不安」が高いほど「対他的同一性」を媒介して「尊重気遣い」（気遣いのプラス面）が促進されるという結果も見られており、この点は予測に反する結果であった。第二に、1・2年生でも3・4年生でも、「充実・満足」が「心理社会的同一性」を媒介して「向社会的気遣い」を促進する結果となり、仮説2（ひとりで過ごすことに関してポジティブな感情・評価が高いほど、自我同一性の主観的側面と社会的側面が高くなり、その中でも、自我同一性の社会的側面が高くなることで、友人への気遣いのプラス面が促進され、マイナス面が抑制されるだろう）が支持された。第三に、「充実・満足」が「心理社会的同一性」を媒介して「向社会的気遣い」を促進する結果は1・2年生でも3・4年生でも共通に見られたが、「孤独・不安」が「自己斉一性・連続性」を媒介して「我慢気遣い」を促進するという結果は1・2年生のみで見られた。また、「我慢気遣い」への影響として、「孤独・不安」「孤絶願望」が「対他的同一性」を媒介して「我慢気遣い」を促進するという点は、3・4年生の方が1・2年生より顕著であることから、「我慢気遣い」への影響が学年によって異なる可能性がある。この点については以降でさらに議論する。

ひとりで過ごすことに関する感情・評価が自我同一性を媒介して友人への気遣いに及ぼす影響

本研究の結果、第一に、どの学年においても、ひとりで過ごすことに充実感や満足感というポジティブな感情・評価を持てることは、「心理社会的同一性」（現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚）という自我同一性の社会的側面を高め、気遣いのプラス面である「向社会的気遣い」を促進することが示された。これは、ひとりで過ごすことの捉え方の成熟（「充実・満足」）が、自我同一性の社会的側面の発達を促し、成熟した気遣い（「向社会的気遣い」）を促進することを示唆する結果であると言える。増淵（2014）は、相関分析において、「充実・満足」と「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「心理社会的同一性」との間に有意な相関が見られたことを示しているが、パス解析では多次元自我同一性4下位尺度の総合得点を使用していたため、「充実・満足」から「自我同一性全体」への正の影響が示されているのみであった。本研究では、「充実・満足」は「対自的同一性」と「心理社会的同一性」に影響していたが、今回の結果から、「充実・満足」は、自我同一性の4側面の中でも「心理社会的同一性」を促進すること、そしてそれが気遣いという対人関係の持ち方にも影響することが新たに明らかになったと言える。

第二に、どの学年においても、ひとりで過ごすことに関するネガティブな感情・評価である「孤独・不安」「孤絶願望」は、自我同一性の社会的側面である「心理社会的同一性」を低め、気遣いのプラス面である「向社会的気遣い」を抑制することが示された。ひとりで過ごすことに孤独や不安が強い場合（「孤独・不安」）と、いつもひとりでいたいという願望がある場合（「孤絶願望」）ではタイプが正反対であるが、どちらも青年期の発達途上に見られる極端な感情・評価という点では共通しており、このようなネガティブな感情・評価を持っていると、現実の社会の中で自分を発揮できるという自信がないため、他者に対して主体的・積極的に行うことが必要な向社会的気遣いは減少してしまうと考えられる。加えて、3・4年生においては、「孤独・不安」「孤絶願望」が高いと、「他者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚」である「対他的同一性」を低め、それによって気遣いのマイナス面である「我慢気遣い」を高めてしまうことも示された。ひとりで過ごすことにネガティブで極端な感情・評価を持っていると、他

者が見ている自分と本来の自分の統合がうまくいかず、他者の中で適応的に自分を表現できなくなるため、本音を我慢する気遣いになってしまうと考えられる。これらの結果は、ひとりで過ごすことの捉え方が極端あるいは発達途上であると（「孤独・不安」「孤絶願望」）、社会的な自我同一性（「心理社会的同一性」「対他的同一性」）が低くなり、友人への気遣いも適応的になりにくい（「向社会的気遣い」が減少し「我慢気遣い」が増える）ことを示しているものであると言える。また、「対他的同一性」から「我慢気遣い」への影響が3・4年生だけに見られたことは、3・4年生という大学生期の後半になっても、「孤独・不安」「孤絶願望」が強く「対他的同一性」が発達しないことは、より不適応につながる可能性を意味しているかもしれない。

これらの第一、第二の結果は、仮説1、仮説2を支持するものであり、社会的なアイデンティティの側面が友人との関係性と関連するという川本（2015）の結果や、ひとりで過ごすことに関してポジティブな感情・評価（「充実・満足」）が高いほど友人に対してもポジティブで安定した感情が高いという海野（2009）の結果とも共通するものであった。友人関係の指標として、川本（2015）は友人に対するアタッチメント・スタイル、海野（2009）は友人に対する感情を用いているが、本研究により、友人への気遣いという面でも同様の結果が明らかになり、また、ひとりで過ごすことに関する感情・評価、自我同一性、友人への気遣いという3つの関係が明確になったと言える。

ひとりで過ごすことに関する感情・評価と自我同一性が友人への気遣いに及ぼす影響の発達差

1・2年生では「孤独・不安」が「自己斉一性・連続性」を低め、「自己斉一性・連続性」が低くなることで「我慢気遣い」が高くなるという影響が見られた。「自己斉一性・連続性」は自我同一性の主観的側面であり、自我同一性の主観的側面が友人への気遣いに影響することは仮説では想定されていなかったが、1・2年生においては自我同一性の主観的側面も気遣いに影響することが示された。「自己斉一性・連続性」とは、「自分が自分であるという一貫性を持っており、時間的連続性を持っているという感覚」のことであり、同一性の感覚の中でもまず重要な感覚であるとされている（谷, 2001）。また、「自己斉一性・連続性」はアイデンティティの層的構造において「中核的同一性」に属するものであり、「中核的同一性」とは、乳幼児期の内的対象の統合と対象恒常性の形成を経て形成されるMahlerのコア・アイデンティティを基礎に青年期に形成されるものとされる（谷, 2008）。ひとりで過ごすことに孤独感や不安感が強いと、ひとりで安心してのびのびと自分らしく過ごしたり、ひとりで趣味に没頭したりすることが難しいため、「自分がない」「自分が自分でない」といった感覚や、過去から現在、未来という時間軸の中での自分という一貫性が持てない感覚につながると考えられる。そして、このような自我同一性の主観的かつ中核的側面である「自己斉一性・連続性」が低くなることによって、対人関係以前にまず基礎となる自分というものが曖昧かつ希薄であるために、友人の中で適切に自分を表現できる関係には至らず、「我慢気遣い」が増えてしまうと考えられる。

一方、3・4年生では、「我慢気遣い」の規定因が異なっていた。3・4年生では、「孤独・不安」「孤絶願望」が「対他的同一性」を低め、「対他的同一性」が低くなることで「我慢気遣い」が高くなるという影響であった。この違いは何を意味するのであろうか。「自己斉一性・連続性」が、自我同一性の対自的で主観的な側面であるのに対し、「対他的同一性」は対他的で社会的な側面である。この2つは、どちらも乳幼児期に形成されるコア・アイデンティティを基礎とする「中核的同一性」に属するとされており（谷, 2008）、どちらが先に発達するかについては言及されていないが、自己のみを対象とする対自的次元よりも、他者との関係性が加わる対他的次元の方がより複雑であると考えられる。1・2年生は、自我同一性が未熟であるため、自分自身の一貫性という自我同一性の基礎的な部分の揺らぎが我慢気遣いにつながってしまうのに対し、3・4年生になると、就職活動も本格化し、他者や社会との関係がより視野に入ってくるため、自分自身の自我同一性の対他的、社会的次元により焦点があたり、我慢気遣いに影響してくるのではないだろうか。また、このような理由から、3・4年生では自我同一性の社会的側面（「対他的同一性」「心理社会的同一

性」）のみ気遣いに影響していたのに対し、1・2年生では、「自己斉一性・連続性」という自我同一性の主観的側面も気遣いに影響する結果となったとも考えられる。

また、1・2年生では、弱い影響ではあるが、「孤絶願望」「孤独・不安」が高いほど「対他的同一性」を媒介して「尊重気遣い」（気遣いのプラス面）が促進される結果も見られ、予測に反する結果であった。「尊重気遣い」は、抑制的気遣いのプラス面であり、親密さを求めない友人満足感と関連するものである（満野・今城, 2017a, 2017b）。「向社会的気遣い」とは異なり抑制的・受動的な気遣いであるため、ある程度距離のある付き合い方であり、友人を尊重して良好な関係を維持しようとするというプラス面だけでなく、相手を尊重する態度を見せつつも「我慢気遣い」より巧妙に葛藤を避けようとするというマイナス面もあるのではないか。そのために、ひとりで過ごすことに孤独・不安感が強かったり、いつもひとりでいたいという極端な感情・評価を持っていたりすると、「対他的同一性」（他者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致している感覚）の低さにつながり、自他の視点の統合の感覚が持てない自信のなさから、深い関わりを避け距離を保つ「尊重気遣い」が促進されると考えられる。松下・吉田（2009）は、友人へ気を遣う関わり方（「気遣い」）や深い関わりを回避する関わり方（「関係回避」）が自我同一性の低さと関連することを明らかにしており、「関係回避」は“お互いのプライバシーにふみこまない”、“友達に甘えすぎない”などの項目からなる。「尊重気遣い」を深い関わりを避ける気遣いだと考えると、「関係回避」と内容的に近いとも言え、自我同一性の低さとの関連が見られたという知見と本研究の結果は一致する。さらに、このように「尊重気遣い」には気遣いのプラス面だけでなくマイナス面も存在すると考えると、1・2年生は3・4年生ほど成熟していないために、距離を取って葛藤を避けようとするというマイナスの意味で「尊重気遣い」が増すとも推測される。

なお、このように、1・2年生では3・4年生よりも、ひとりで過ごすことに関するネガティブな感情・評価から「我慢気遣い」や「尊重気遣い」への影響が見られたことに関しては（「孤独・不安」から「自己斉一性・連続性」を媒介した「我慢気遣い」への影響、および「孤独・不安」「孤絶願望」から「対他的同一性」を媒介した「尊重気遣い」への影響）、成熟だけでなく友人との親密さの違いも関係しているかもしれない。1・2年生は、大学に入学し、同じ学科やサークル、アルバイト先などの新たな人間関係の中で友人関係を一から形成していくことが多い時期であるため、ひとりで過ごすことへの不安や新たな友人関係の苦痛が、遠慮が大きい気遣いにつながってしまうが、3・4年生になると、程よくひとりで安心して過ごせるようになり、友人関係も安定し気心の知れたものになるため、気遣いへのネガティブな影響が減ると考えられる。

ひとりで過ごすことに関する感情・評価から友人への気遣いへの直接効果

直接効果としては、第一に、「自立願望」から「向社会的気遣い」「尊重気遣い」への正の影響が見られた。「自立願望」は、ひとりで過ごすことをポジティブに受け止めようとし、ひとりでも過ごせるようになりたいという願望や、自立的なイメージを抱いている感情・評価である。他者と離れた自分自身のプライバシーを志向するため、友人のプライバシーも尊重しようとする態度が生まれ、距離を保ち関係を維持する付き合い方である「尊重気遣い」が増すと考えられる。また、友達と一緒でなくても行動できる、「ひとりの時間」を楽しめるなどの自立を目指す感情・評価であるため、対人関係においても自立し成熟したいという気持ちが高まり、「向社会的気遣い」が促進されると推測される。

第二に、「充実・満足」から「尊重気遣い」への弱い正の影響が見られた。「充実・満足」は、自分自身のプライバシーを志向し、そこでの充実・満足感を感じる感情・評価であることから、「自立願望」と同様に、友人と一定の距離を保つ付き合い方である「尊重気遣い」が増す可能性が考えられる。

ひとりで過ごすことと友人への気遣いの発達、および尊重気遣いの扱いについて

上述のように、「自立願望」は、ネガティブな感情・評価でもポジティブな感情・評価でもな

く、ひとりで過ごすことをポジティブに受け止めようとする（が、まだうまく受け止めきれず、うまくひとりで過ごせない）感情・評価であり、ネガティブとポジティブを併せ持つ、青年期の発達途上の状態を表した感情・評価とも言える。一方で、本研究の仮説では「尊重気遣い」を気遣いのプラス面と捉えていたが、本研究の結果から、実際には、友人を尊重して良好な関係を維持しようとするというプラス面だけでなく、相手を尊重する態度を見せつつも「我慢気遣い」より巧妙に葛藤を避けようとするというマイナス面もある可能性が明らかになった。したがって、「尊重気遣い」は、プラス面とマイナス面を併せ持つという意味で、「自立願望」に近い、青年期特有の心理を反映している可能性がある。

しかしながら、一方で、「尊重気遣い」は、自我同一性とはあまり関連が見られなかった。このことから、尊重気遣いは、自我同一性の発達が関連するというよりも、友人や他者と接する上でのマナーやスキルの獲得の影響が大きいのではないかとも考えられる。「尊重気遣い」は、親密さを求めない友人満足感との関連が見られていることからも（満野・今城, 2017b）、お互いに不快感を与えずに関係を維持するスキルであると言える。

どのような理由から「尊重気遣い」をするかが人によって異なる可能性があるため、その理由により、プラス面となるかマイナス面となるか、あるいはスキルとしての気遣いであるかが明確になるかもしれない。また、親友に対してもそれ以外の人に対しても「尊重気遣い」をするのか、親友に対しては「向社会的気遣い」が多いがそれ以外の人に対しては「尊重気遣い」が多いのかなどの場面差や相手による差によっても、適応的か否かが異なると考えられる。なお、満野（2015）は、「利他的理由」が「向社会的気遣い」に、「防衛的理由」が「抑制的気遣い」に影響することを明らかにしているが、「抑制的気遣い」を「尊重気遣い」と「我慢気遣い」に分けた場合の理由の影響は検討されていないため、今後の検討が必要である。

尊重気遣いと我慢気遣いの違い

「尊重気遣い」と「我慢気遣い」は、どちらも抑制的気遣いの2側面であり（満野・今城, 2017a, 2017b）、1・2年生においても、3・4年生においても、ある程度高い相関が見られた（rs = .65～.66）。しかしながら、多母集団同時分析の結果から、「我慢気遣い」に対しては自我同一性との関連が複数見られているのに対し、「尊重気遣い」に対しては自我同一性との関連はあまり見られず、ひとりで過ごすことに関する感情・評価からの直接効果が中心であった。このことは、「尊重気遣い」と「我慢気遣い」が、同じ抑制的気遣いではあっても、規定因の異なる、別の種類の気遣いであることを実証した結果であると言える。「我慢気遣い」が自我同一性の低さによって促進されるのに対し、「尊重気遣い」には、自分自身のプライバシーの志向や対人スキルが主として関わっている可能性が示唆された。

本研究の限界と今後の課題

本研究の結果は、ひとりで過ごすことに対する感情・評価が、友人への気遣いという対人関係に影響することを示すものであった。しかしながら、本研究の限界と今後の課題として以下の点が考えられる。

第一に、本研究の対象は女子大学生のみであった。満野・今城（2017b）は、友人への気遣いと親友満足感および親密さを求めない友人満足感との関連について、男女で結果が異なることを明らかにしている。今後は、男子大学生も対象に含め検討することにより、男女の共通点と相違点がさらに明確になると考える。

第二に、「尊重気遣い」がどのようなものであるかのさらなる解明である。「尊重気遣い」をする理由の違いや場面による使い分けがあるのか、それによって青年の適応はどう異なるのかなどを検討することで、「尊重気遣い」の発達的位置づけがより明確になり、青年の理解や発達支援に役立つと推測される。

第三に、大学生期以前の中学生や高校生を対象とした検討である。青年期前期の段階では、ひとりで過ごすことに関する感情・評価が友人への気遣いとどのように関連しているかを検討することにより、青年の個と対人関係の発達に関する示唆が得られると考える。

注　追加項目には、Table 2においてaを付す。また確認的因子分析の結果、採用されなかった

追加項目を以下に示す。

28　自分の気分が落ち込んでいる時も、友人にそれが伝わらないように明るく振る舞う

29　友人の服装が似合っていないと思っても、言わないでおく

31　友人の愚知を「たいしたことない」と思っても、最後まで聞いてあげる

37　友人からのプレゼントが自分の欲しかったものではなくても、喜んだ振りをする

39　友人から誘われれば、自分ではやりたくないことでも、我慢して付き合う

42　友人が悩んでいると気づいても、こちらからはそれを話題にしない

44　友人の髪形が似合っていないと思っても、言わないでおく

付記　本研究は、平成29年度昭和女子大学研究助成金の助成を受けて行われた。

引用文献

朝日新聞（2009）．友達いなくて便所飯？　7月6日夕刊

朝日新聞（2014）．自称「ぼっち」の予防線　6月29日朝刊

原田　新（2012）．発達的移行における自己愛と自我同一性との関連の変化　発達心理学研究，*23*，95-104.

畑野　快（2010）．青年期後期におけるコミュニケーションに対する自信とアイデンティティとの関連性　教育心理学研究，*58*，404-413.

畑野　快・原田　新（2014）．大学生の主体的な学習を促す心理的要因としてのアイデンティティと内発的動機づけ―心理社会的自己同一性に着目して―　発達心理学研究，*25*，67-75.

稲垣実果（2013）．思春期・青年期における自己愛的甘えの発達的変化―自我同一性との関連から―　教育心理学研究，*61*，56-66.

川本哲也（2015）．成人形成期のアイデンティティと複数の社会的関係性の関連―養育者・友人・恋人に対するアタッチメント・スタイルの違いに注目して―　発達心理学研究，*26*，210-224.

町沢静夫（2002）．学校，生徒，教師のためのこころの健康ひろば　駿河台出版社

増淵（海野）裕子（2014）．大学生における「ひとりの時間」の検討および自我同一性との関連　青年心理学研究，*25*，105-123.

松下姫歌・吉田　愛（2009）．大学生における友人関係と自我同一性との関連　広島大学心理学研究，*9*，207-216.

満野史子（2015）．大学生の友人関係における気遣いの研究―向社会的・抑制的気遣いの規定因と影響―　風間書房

満野史子・今城周造（2017a）．友人への気遣いとマインドフルネス，反芻・省察及び友人満足度との関連―気遣い尺度の因子構造の再検討―　昭和女子大学生活心理研究所紀要，19，11-20.

満野史子・今城周造（2017b）．改訂版友人関係における気遣い尺度の作成―親友満足感，親密さを求めない友人満足感との関連―　日本パーソナリティ心理学会第26回大会論文集，69.

宮下一博（2009）．序章　宮下一博（監修）　松島公望・橋本広信（編）　ようこそ！青年心理学―若者たちは何処から来て何処へ行くのか―（pp. 1-8）　ナカニシヤ出版

谷　冬彦（2001）．青年期における同一性の感覚の構造―多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成―　教育心理学研究，*49*，265-273.

谷　冬彦（2008）．アイデンティティのとらえ方　岡田　努・榎本博明（編）　自己心理学：5　ナリティ心理学へのアプローチ（pp.6-21）　金子書房

東京新聞（2014）．「ぼっち」のススメ　「孤独」を「孤高」の時に　4月23日朝刊

海野裕子（2009）．大学生における「ひとりの時間」と，感情との関連　昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要，*18*，79-92.

ますぶち　ゆうこ（昭和女子大学生活心理研究所）
みつの　ふみこ（東京大学先端科学技術研究センター）
いまじょう　しゅうぞう（昭和女子大学大学院生活機構研究科）